移民第二世代と進路選択
――日本で育つ若者たちの進路選択の意味づけに着目して――

一橋大学大学院・日本学術振興会　山野上麻衣

1. 目的

移民第二世代の研究は日本においては教育達成、とくに高校・大学進学の可否の規定要因を中心に議論されてきた。進学できるか否かは在住外国人特別枠の整備状況等、制度的条件の地域的差異や、家族の各種資本の多寡など構造的条件により説明されてきた。他方で、移民第二世代の教育達成や社会移動を説明するにあたり、「成功」についての当事者による意味づけを重視する研究も出てきている（Louie, 2006; Lee and Zhou, 2015）。何を「成功」とみるのか、準拠集団はどこのどの集団なのか。それらの価値づけにトランスナショナルな二重の準拠枠組みがどのように影響を及ぼしているのか。言い換えるならば、移民第二世代の若者たちのエイジェンシーはどのように形成、行使され進路選択と結びついているのか。構造的制約の存在を前提としつつも、これらの主観的要素に着目する問いは、日本社会においても示唆的であろう。本報告においては、移民第二世代の若者たちが進路選択の局面にあたってどのような規範を参照しているのか、準拠集団はどこにあるのか、進路にかかわる選択をどう意味づけているのかを明らかにすることを目的とする。なお、本報告においては、大人への移行過程において、進学、就労、家族形成など、その後の人生に継続的に影響を及ぼす選択に直面した際に、選びうる多様な道筋を進路と呼んでいる。

2. 方法と対象

方法としては、20 代の移民第二世代の若者へのライフストーリーインタビューを用いる。日本に一定規模のコミュニティが存在する移民集団のなかで、統計的に高校・大学の進学率が低いとされる集団のひとつであるブラジル人を主要な対象とする。

3. 結果

今回の調査の範囲では、基本的には参照されている準拠集団は日本国内にあった。日本国内のどのような集団を準拠集団としているのかについてはいくつかのバリエーションが見られた。いわゆる中堅以上のレベルの高校に通った若者たちは、大学進学経験の有無にかかわらず、大学進学し新卒で企業等で働き始める日本人の友人たちと関係を保ち続け、進路を考える際に、そのような人びとが比較対象や目標となっていた。日本人の「地元つながり」に包摂され、その文脈のなかで自らの就労や家族形成を意味づける若者もいた。日本育ちのブラジル人同士で結婚し、家族や友人をはじめとする日本国内のブラジル人コミュニティが準拠集団となっている例もあった。

基本的な準拠集団は日本国内にある一方で、大卒者や大学生であっても、日本の偏差値秩序や新卒就職、年齢主義へのこだわりを強く内面化している若者はいなかった。知識の欠如とみれば構造的制約と解釈することも可能ではあるが、親などを経由して得られたブラジル社会の規範に照らして、進学や就労など生き方を決めていく際の基準を有しているのではないかと考えられる。

文献

Lee, Jennifer and Zhou, Min, 2015, *The Asian American Achievement Paradox*, New York: Russell Sage Foundation.

Louie, Vivian, 2006, “Second-Generation Pessimism and Optimism: How Chinese and Dominicans Understand Education and Mobility Through Ethnic and Transnational Orientation”, *International Migration Review*, 40(3):537-572.